

四面楚歌 時利あらず

①項王の軍垓下に壁す。
は 立てこもつた

②兵少なく食尽く。
は 尽きた

③漢軍及び諸侯の兵、之を囲むこと数重なり。
は 包囲する であつた

④夜漢軍の四面皆楚歌するを聞き、項王乃ち大いに驚きて曰はく、
をうたつてゐるの そこで 言うことには

⑤「漢皆已に楚を得たるか。⑥是れ何ぞ楚人の多きや。」と。
は 手に入れたの これ と が多い ことよ

⑦項王則ち夜起きて帳中に飲む。⑧美人有り、名は虞。
は 本陣の (決別の) 酒宴を開いた が いつた であつた

⑨常に幸せられて従ふ。⑩駿馬あり、名は驥。⑪常に之に騎す。
は 従つていた が といつた 项王は これ 乗つていた

⑫是に於いて項王乃ち悲歌。恍慨し、自ら詩を為りて曰はく、
は そこで 憤り嘆いて 作つ いうことには

私の力は

⑬ 力山を抜き 気世を蓋ふ

私の力は

覆つた

⑭ 時利あらず 離逝かず

運は不利で進まない

⑮ 離の逝かざる 奈何すべき

が進まないのは進まない

⑯ 虞や虞や 若を奈何せん

よおまえどうしようか

⑰ 歌ふこと数闇、美人之に和す。⑰ 項王泣数行下る。

歌う回はこの歌は応える詩を作り

⑯ 左右皆泣き、能く仰ぎ見るもの莫し。

の臣下は項王を見ることのできる者はいなかつた

項王の最期

① 是に於いて項王乃ち東のかた烏江を渡らんと欲す。

そこでははこの歌は歌つたは

② 烏江の亭長、船を楫して待つ。

宿場の用意し待つていた

③ 項王に謂ひて曰はく、「江東小なりと雖も、地は方千里、

向かつ言うことには狭い

衆は數十万人、亦王たるに足るなり。

いるまたである十分

④ 願はくは大王急ぎ渡れ。⑤ 今独り臣のみ船有り。

どうか急いで渡つて下さい

⑥ 漢軍至るも、以つて渡る無し。」と。

が到着して使うて船をことはできません

※ク語法【体】+ク

⑦ 項王笑ひて曰はく、「天の我を亡ぼすに、我何ぞ渡ることを為さん。
それに私以前は笑つと言ふことには滅ぼすの。」
しましようかいや、渡りません。

⑧ 且つ籍は江東の子弟八千人と、江を渡りて西す。
渡つ西に向かつた

ところが帰つた者はいない
⑨ 今一人の還るもの無し。

あつ保護者お目にかかることができようか（いや、できない）
ありて之に見えん。

あつ保護者が同情して何も言わなくても私はどうして恥じないことがありますか

縱ひ彼言はずとも、籍独り心に愧ぢざらんや。」
（いや、恥に思います）

乃ち亭長に謂ひて曰はく、「吾公の長者たるを知る。
そこで宿場の向かつて曰はく、
（いや、恥に思います）

吾此の馬に騎すること五歳、当たる所敵無し。
乗る向かう

嘗て一日に行くこと千里なり。
走るであつた

以つて公に賜はん。」
この馬をあなたが我慢できず。

この馬をあなたが我慢できず。

そこで騎馬兵に歩行せ、刀剣を持つ。

⑯乃ち騎をして皆馬を下りて歩行せしめ、短兵を持して接戦す。

⑯獨り項王の殺す所の漢軍、数百人なり。

⑯項王の身も亦十余創を被る。

項王はふと

体また箇所の傷被つた

⑯顧みるに漢の騎司馬呂馬童を見たり。

項王が言うことにはお前旧友ではないか

曰はく、「若は吾が故人に非ずや。」と。

馬童は顔を背け示して言うことにはこれである

馬童之に面し、王翳に指して曰はく、「此れ項王なり。」と。

項王乃ち曰はく、「吾聞く、漢我が頭を千金・邑万户に購ふと。」

そこで言うことには私は

馬童之に面し、王翳に指して曰はく、「此れ項王なり。」と。

吾若が為に徳せしめん。」と。・乃ち自刎して死す。

私お前のため恩恵を施させよう。

使役項王が漢に馬童に対して賞金を施させる